



伊賀・甲賀流忍術
を集成した秘伝書
『萬川集海』

地域の魅力を伝える ストーリー

「地域に残る多様な文化遺産を、魅力的なストーリーとしてパッケージ化する。日本遺産のコンセプトは、忍者を生んだ甲賀の豊かな歴史文化を掘り起こし、アピールするのびったりだと考えました」。日本遺産認定をめざしたきっかけを、長峰さんはそう語る。

「日本遺産 (Japan Heritage)」とは、文化財に物語性を持たせ、観光振興などにつなげる活



忍者の里の複雑な地形。空から見ると、樹枝状に侵食された谷地形が広がっている

動を評価するもの。地域に残る歴史遺産（建造物、遺跡、祭りなど）を組み合わせ、文化や伝統を語る「ストーリー」としてまとめあげ、文化庁が認定する。文化財の価値づけや保存を目的とする指定

文化財制度等とは異なり、地域に点在する遺産を「面」として活用・発信することで、地域活性化を図ることが目的だ。

忍者の存在は広く知られていても、今なお謎に満ちており、真の姿を知る人は少ない。求められているのは忍

者の本当の姿、「リアル忍者」ではないか。そこで甲賀市は、三重県伊賀市と共同で「忍びの里 伊



巨岩、奇岩が屹立した山伏の行場（飯道山）

忍者を生んだ風土

ストーリーを構成する甲賀の文化財には、「中世城館群」や「甲賀衆結束の鎮守の社」「山伏の修練場」など、忍者の里を示す12の文化遺産が盛り込まれている。

忍者の里の特徴として、まず挙げられるのが複雑な地形だ。甲賀・伊賀には、太古、粘土層が侵食されてできた古琵琶湖層という複雑な谷地形の丘陵が広がる。ひとた

び迷い込むと方向感覚を失い、侵入者を混乱させる。

この地形を利用し、戦国時代、見晴らしの良い丘陵の先端や谷の入口のあちこちに城館を築いたのが「甲賀衆」「伊賀衆」と呼ばれた地侍たちだ。強大な大名が現れなかったこの地で、地侍たちは自衛のため互いに連携し、掟を定め、自治を行った。鎮守の社は彼らの合議の場。隠れ里である一方で、京都や奈良に程近い要地であり、情報が入りやすく、古くから時の権力者の恰好の亡命地でもあった。

旬 究 N I P P O N

知られざる忍者の世界

——忍びの里・甲賀

手で印を結んで煙とともに消える——

謎めいた雰囲気て人々を魅了し、アニメを通じて海外でも人気の高い忍者。

その実像はどのようなものだったのか。2017年4月

「忍びの里 伊賀・甲賀——リアル忍者を求めて」が日本遺産に認定された。

忍術や忍者を育んだ風土、そこに残る数々の史跡や歴史とは？

甲賀市歴史文化財課課長の長峰透さんに話を聞いた。

日本遺産のストーリーでは、彼ら地侍こそ、リアル忍者の実像だとする。

「ゲリラ戦を得意とした彼らは各地の大名に傭兵として雇われ、忍者働きをして功績をあげたのではないかと想像できます」。実際、天正10（1582）年、本能寺の変直後に堺から三河への最短ルートとしてこの地を駆け抜けた徳川家康を、伊賀者・甲賀者が護衛した際の活躍は、「神君伊賀越え」として語り継がれている。

豊かな宗教生活文化

甲賀の宗教文化・生活文化も、忍術・忍者と深く結びついている。手で印を結んで術を使ったり煙幕を張って姿を消す忍者のイメージには、密教や修験道の影響が見られるように、甲賀は天台密教の布教拠点でもあり、檿野寺には本尊木造十一面観音坐像をはじめ多くの仏像が残る。飯道山には今も山伏の行場があり、山岳修行の跡を見れば、自然を相手に心身を鍛錬した忍者の姿が思い浮かぶ。甲賀そして滋賀の地場産業である薬業は、薬草の知識を持つ山伏たちが配札（布教）の際、諸国に薬を授けて回ったことが起源。甲賀はま



近江屈指の修験霊場である飯道山での護摩修行。護摩の煙に、忍者が姿を消すときのイメージが重なる



左／甲賀衆結束の鎮守の社の一つ「矢川神社」 中／甲賀衆が崇敬した総社「油日神社」。廻廊は甲賀衆の合議の場となっていた
右／神君伊賀越えの際の功績により江戸時代を通じて代官を務めた多羅尾氏の「代官陣屋跡」

た、古くから東大寺にも用材を供給した地。林業やノコギリ製造業も栄えた。忍術秘伝書『萬川集海』には、さまざまな忍びの術や呪術、先進技術だった薬や火薬、鋸などの忍具が集大成されている。

「山伏の修練場」「甲賀のくすり」「甲賀の前挽鋸」——ストーリーを構成する文化遺産の幅広さは、この地に暮らした人々の豊かな宗教文化・生活文化が、忍術・忍者を育んだことを示している。生活圏である複雑な地形の山野を自由に行き来することで身体能力が磨かれ、山林従事者として木から木へと飛び移ることにより人並み外れた跳躍術も身につけた。修験者として精神統一の術や薬・火薬の調合の技などが忍者の技能として活かされ、忍術は決して荒唐無稽な術ではなかった、と長峰さんは言う。

これら個々の文化が、「忍者」というキーワードを通して一つに



極彩色に彩られた「飯道神社」

や映画で描かれる独特のイメージが形成されてきた。それも一つの忍者像だが、甲賀市ではフィクションの世界とは異なる、歴史上のリアルな忍者の面影を見つけることができる。日本遺産認定前から毎年、忍者の日である2月22日を中心に忍者に関するさまざまなイベントを開催。忍者検定も既に10回以上実施している。

今回の認定を機に、忍者の魅力を国内外に発信し、さらなる観光客誘致にも力を入れていきたい考えだ。

リアル忍者を感じる文化財を地域資源化していくために、課題もある。その一つが、忍者を感じる



甲賀のくすり

つながることが興味深い。「忍者に関する資料は少なく、確実に証明する記録はそうありません。しかし今日に残る甲賀の文化的要素をつないでいくと、そこに忍者の姿が見えてくるのです」

リアル忍者を感じて

忍者は江戸時代から歌舞伎や読本に取り上げられ、今日のアニメ

甲賀の前挽鋸。忍具にも多様な形状の鋸が登場する



ストーリーを、訪れた人にどう伝えるか。「忍者は目に見えません。城館、仏像、山伏の修練場。個々の歴史遺産の背景をつなぐ忍者の存在を、きちんと伝えていかなければ」。忍者をキーワードにした観光ルート設定、ストーリーを伝える冊子の作成、語り部の養成などが必要だ。

「この地から、なぜ忍者が生まれたのか。それに思いを馳せ、忍者の気配を感じていただきたい」と長峰さん。「忍びの里」の多彩な取り組み、壮大な物語に、期待が高まる。【文】